

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1	新潟町の盆踊り	P.2~3
特集2	第十一回むかしのくらし展 冬のにいがた	P.4
歴史さんぽ	初代萬代橋の木杭	P.5
おすすめの一冊	「館 柳湾」	P.5
みなとびあ 研究notes	新潟市下山字根室の新潟地震による被害写真について	P.6
館長日記	鶴の友とは	P.7
収蔵資料紹介	綿切り	P.7
博物館 あちらこちら	旧第四銀行住吉町支店 回廊	P.8



本館より「ときね丸」を臨む
(古典技法「サイアノタイプ」を使ったプリント)

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	申込み・対象・参加費
9月27日 14:00~16:00	みなとびあ もめん部	事前申込み必要・通年(2ヶ月に1回)
9月27日 13:30~15:00	むかしのあそび お手玉・手あそびをしよう	不要・無料
9月28日 14:00~15:30	むかしのあそび ふるしき・ハンカチあそびをしよう	メールで申し込み・先着15人程度・無料
10月5日 13:30~15:00	むかしのあそび 凧作り・手あそびをしよう	不要・無料
10月26日 13:00~16:00	どんぐりざんまい! アクセサリーやおもちゃ作り	不要・材料がなくなり次第終了・無料
11月2日 10:30~12:00	親子で自然体験をしよう 秋	10月30日(休)必着 未就学児とその保護者先着15組・無料
11月22日 14:00~16:00	みなとびあ もめん部	事前申込み必要・通年(2ヶ月に1回)
11月22日 13:30~15:00	むかしのあそび あやとり・手あそびをしよう	不要・無料
12月13日・12月14日 10:30~15:00	わら紙でハガキ作り	不要・材料がなくなり次第終了・無料
12月21日 14:00~15:30	木の実でクリスマスキャンドル作り	12月11日(休)必着 小学生以上20人・100円
1月4日 14:00~15:30	むかしのあそび お正月あそび(すごろく・コマなど)	不要・無料
1月11日 13:30~15:00	むかしのあそび 竹なご・手あそびをしよう	不要・無料
▼ 大人向けモノ作り体験 ▼		
11月30日・12月7日 14:00~16:00	わらざうり作り①②(全2回)	11月20日(休)必着 両日参加できる16歳以上の方9名・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。
プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

お知らせ

【みなとびあボランティア企画イベント】

■ 第5回写真会「みなとびあで絵を描こう」
日時：9月28日(日)
10:00~14:00(終了次第お帰り可能)
持ち物：写生道具(絵の具、クレヨン、画板など)・飲み物・昼食
申込み：①お名前②住所③電話番号④学校・学年/一般
上記項目をメール・FAX・はがきのいずれかにて、
当日までにお知らせください。
*10/19に表彰式を行います。それまでの期間、
全作品をみなとびあにて展示します。

■ みなとびあ10周年感謝祭
みなとびあボランティアがこれまでの活動の感謝を込めて、
プログラム満載の一大イベントを開催します!
日時：10月19日(日) 10:00~15:00
観覧料：常設展のみ有料
(一般300円/大・高200円/小・中無料)
内容：ガイドツアー(常設展・敷地・塔屋見学会)、
体験プログラム、音楽・踊りのステージ、飲食出店

【開館10周年特別企画海外ツアー】

■ 西安博物院と古都西安の魅力を訪ねる充実の5日間
友好提携を結んだ中国西安博物院の協力のもと、博物院と
西安の史跡を巡るツアーです。
旅行期間：10月11日(土)~15日(火) 4泊5日
旅行代金：110,000円(2名1室利用時の1名様料金/
燃料サーチャージ等別途必要)
主な見学地：兵馬俑博物館・陽陵等の陵墓・西安博物院など
事前学習会：申込者対象/10月4日(土)13:30~15:00/
本館2階セミナー室にて
申込み：(株)キャラバンツアー (Tel.025-227-6333)

現在 開催中 企画展

第11回むかしのくらし展「冬のにいがた」

開館10周年を記念して、むかしのくらし展第1回目テーマを引き継ぎ、冬の新潟で営まれた生活文化を紹介します。

会期 2014年 9月6日(土)~12月23日(火)・祝
観覧料 無料 *常設展の観覧は有料です
休館日 9/8(月)・16(火)・24(水)・29(月)・10/6(月)・14(火)・20(月)・27(月)・11/4(火)・10(月)・17(月)・25(火)・12/1(月)・8(月)・15(月)・22(月)

関連イベント

■ 石臼でお団子を作ろう

内容：石臼を使って粉をひいて、その構造を知り、粉食文化について学びます。
日時：9月20日(土)・21日(日)
14:00~15:30
会場：博物館1階たいけんのひろば
対象：小学生以上・先着順1回6人ずつ
申込：不要

■ 高機体験

内容：高機を使って布ができてあがる仕組みを体験します。
日時：11月8日(土)・9日(日) 14:00~16:00
会場：博物館1階たいけんのひろば
対象：小学生以上
申込：プログラム名・希望日・氏名・学年・住所・連絡先電話番号を、メールかFAXにて、11月4日必着。

■ もちつき大会

内容：ウスとキネを使ったもちつきを体験します。
日時：12月20日(土)
11:00~14:00
会場：博物館1階
エントランスホール
申込：不要



次回 企画展

合併100周年記念「沼垂」展

新潟市との合併100年の節目を記念して、沼垂の歴史を紹介します。

【会期】 2015年 1月10日(土)~2月8日(日)
【休館日】 1/13(火)・19(月)・26(月)・2/2(月)
【観覧料】 無料 *常設展の観覧は有料です。

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。
時間：13:30~15:00
会場：本館2階セミナー室
申込：不要(当日受付・定員80人程度)
資料代：100円(資料のない回は無料)

■ 9月の講座：9月28日(日) 講師：田嶋 悠佑
「戦国武士の就職活動
— 新発田重家の乱・従軍者のゆくえ —」
■ 10月の講座：10月26日(日) 講師：小林 隆幸
「牡丹山古墳発見の意義を考える」
■ 11月の講座：11月23日(日) 講師：渡邊久美子
「まつり・民俗芸能 — 研究史の整理と課題 —」

博物館 あちらこちら

旧第四銀行住吉町支店 回廊

旧第四銀行住吉町支店の、現在レストランに使っている営業室の上に、回廊がめぐっています。昔はどこの銀行の営業室も吹き抜けで天井が高く造られていました。電灯の照度が十分でなく、高い窓から明かりを取る必要があったのです。また、机の上の紙幣や書類が飛ばないように、1階の窓は開けず、上の窓を開けて換気しました。回廊はこの高い窓の開閉や清掃に不可欠でした。当館の回廊は2階の会議室・廊下・日本間から出入りできます。銀行のエライ人が下の行員の働きぶりを眺めたのでしよう。現在、危険なものと食事している人をのぞくことになるため、回廊は立ち入り禁止ですが、会議室から様子を見ることができます。



編集後記

10周年記念の催しが続々予定されています。第11回むかしのくらし展「冬のにいがた」は、記念すべき第1回のテーマを引き継いだもの、西安市への海外ツアーは、開館初年の特別展「長安文物秘宝展」から続く西安市との交友によって企画されたものです。また開館当初から活動して下さっている市民ボランティアの発案で、10周年を祝う感謝祭も開催されます。10年の縁を想いつつ、多くの方のご参加・ご来館をお待ちしています。(中村)

■ お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel：025-225-6111 Fax：025-225-6130
E-mail：museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日
【開館時間】 (4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



新潟町の盆踊り

安宅 俊介



写真1 「蟹の手振り」(当館蔵)より「盆踊り」

はじめに

「にいがた総おどり」は、ジャズやヒップホップ、フラダンスなど多彩なジャンルが集う踊りの祭典です。いまや毎年二〇万人の観客動員があり、今年で十三回目を迎えたそうです。

この「にいがた総おどり」で踊られる「新潟下駄総踊り」は、江戸時代の新潟町の盆踊りを参考に創作されたものだそうです。この盆踊りに関する史料を、江戸時代を中心にいくつか紹介したいと思います。

一 「蟹の手振り」

新潟町の盆踊りを語る代表的な史料に、天保十四(一八四三)年に初代新潟奉行となつた川村修就がのこした「蟹の手振り」があります。「蟹の手振り」は

画と詞書によって、新潟の風物六景を伝えるものです。

詞書によれば、盆踊りは七月十四日から十七日まで夜ごと町中で踊り、十八日の夜には毘沙門島で踊りました。暮れ近くになると十四、五歳の女子が揃って踊り始め、これが「月のや、高きさしのほる頃」になると老若男女が、思ひ思いの仮装をして踊ります。

写真1は「蟹の手振り」の盆踊りの画です。人びとが下駄を履き、様でない衣装をまとい、自由な身振りで踊っているさまが描かれています。その多くは、団扇を持つようです。また、樽の側面や上面を木槌で叩いて音を鳴らすという新潟特有の姿も見られます。スニーカーも無かつた時代です。樽叩きを中心に踊りの輪があちらこちらでできたのでしよう。そうして「月の更渡る頃」になつても、町はうたい舞う人びとで、かしましい様子でした。描かれた月は盆踊りの頃、十五夜前後の満月です。

新潟町の盆踊りは、決まつた振りが無いことが特徴でした。川村は盛り上がる盆踊りの様子を「いかにも興に入りたる有さま」としています。盆踊りのあいだは昼を寝て過し、夜は通して踊るといふ日々が続きます。

五 「乍恐」

「新潟町会所文書」の中には「乍恐」と題された、慶応四年から明治三年(一八六八〜七〇)頃までと想定できる下書き文書があります。これによれば新潟町の盆踊りは七月十五日から十七日の「黄昏」より「何義ともなく」踊るものとされています。

これまで見てきた通り、盆踊りが始まる日は、史料によって十三日、十四日、十五日と異なっています。いずれも十七日に終わるとあり、期間は三日から五日間と、幅があつたようです。

また、踊り方に決まりがなかつたことは前述しましたが、踊る場所についても、「本町、古町、寺町、何方となく横行仕候」とあり、町中で踊つていたことがうかがえます。

なお、この史料は酔狂の上の雑言で、「御警衛御武家様」に対して「不礼」があるかもしれないという文で、途切れています。

六 「米沢藩長尾景貞日記」

これは慶応四年、列藩同盟側の米沢藩長尾景貞が新潟町に詰めていた時の日記です。七月十四日から十七日まで行われた盆踊りの様子を詳しく知ることができます。

「七十四橋」の橋上や街道辻の広場などで「踊り狂」う人びとの姿、「女は白ふんどし」「緋縮緬又ハむらさきちりめん」といった服装、さらに「男かと思へは是皆女なり」「女と見れば是皆男也」と男装女装が多く見られたようです。ま



絵はがき 浜辺の盆踊り(当館蔵)

二 「盆踊図」

写真2は、川村修就の遺品のひとつ雪汀筆「盆踊図」です。「蟹の手振り」のそれより画面中の人数は少ないものの、鮮やかな着物、髪飾りやかぶり物、団扇や扇子、銘々の表情や躍動的な体のうごきが精緻に描き込まれています。盆踊りの空間に広がる音や息づかいが、伝わってくるようです。



写真2 雪汀筆「盆踊図」(当館蔵)

画面右下には、バラバラの衣装をまとう人びとの中にあつて、揃いで雲龍図風の柄の衣をまとつた男が二人描かれています。一人は樽を叩き、そしてもう一人は団扇を下げて、顔に手を当てています。二人で休み休み交代しながら樽を叩いていたのでしようか。

三 「新潟市中風俗書」

天保十四年十二月の「新潟市中風俗書」は、川村修就が新潟奉行に就任早々、町方へ新潟町のしきたりを報告させたものです。これから盆踊りとその前後の新潟町の様子を見ていきましょう。

七月の新潟町は賑やかな日々が続きます。盆踊りの前、七月一日から七日までは町の「大イベント」「湊祭」が行われます。この「湊祭」が終わると町は盆に向かつていきます。

「十日から十三日朝までは「盆市」といふ、団扇や扇子は「顔をおほひ」とあり、単に涼をとるためだけではなかつたことがうかがえます。

仮装についても「神主」「南京人」「役者」「石川五右衛門」「薬人形」など、まさに「異類異形」の様子が記されています。

踊りを見た長尾は、あまりの賑やかさに話も筆も尽きない、と記しました。しかし地元の人から、戦争中なのでこの賑やかさは「太平之世」の五分の二程度のものであると言われ、長尾は「新潟の繁栄開しに勝り」と感嘆しました。

四 「おわりに」

近代以降の盆踊り
明治五(一八七二)年六月に楠本正隆が新潟県令として着任しました。楠本は開化政策を進めて、明治六(一八七三)年七月十四日には盆踊りを禁じました。これは新潟町のみならず、県内の盆踊りすべてが対象でした。

こうして表立って盆踊りは行われなくなりましたが、ひと月遅れで盆踊りをする者などがいました。このため盆踊り禁止の布達は、以後も数度出されています。盆踊りが再び表立って行えるようになるのは、明治三十二(一八九八)年に新潟知事の勝間田稔が許可してからです。十二時以降は踊りが禁じられ、また歌詞や仮装に制限が加えられましたが、人びとは時間を過ぎてあちらこちらで樽を叩き、うたい踊つていたといえます。

昭和七、八年頃になると盆踊りに変化が訪れます。これは新潟で民謡の活動を行っていた鈴木節美の働きが大きい

う市が現在の本町通五〜七番町に立ちます。また、十三日からの盆中には、差しかつた用事がある者以外は、町役人も町会所へ出勤をしません。十五日から十七日まででは、商人職人たちも休日です。

十三日、「聖霊」をまつる家々では暮れ前に軒先で「迎火」を焚きました。また、町中の人びとは「灯を灯して、墓所へ行き供物や香花をそなえます。」

「風俗書」では十三日から十七日までが、盆踊りの期間とされています。十三日から町中で軒に「挑灯」を釣りました。また役職や格式がある者たちは、台付の「台挑灯」を出しました。暮れ前には町の子どもが男女とも「躍着」をまといて踊りました。暮れ過ぎから桶を叩き、老若男女は入り交じり、うたい踊り歩きました。

なお「風俗書」にはかつては華美な衣装をまとつた遊女が、暮れ前から町に出歩いてきたが最近ではこれが無くなり、夜のみ種々の衣類で出歩くようになったと記されています。

十六日は「聖霊」を送る家々で「送火」を焚きます。町中の盆踊りは十七日に終わり、十八日は毘沙門島で踊りが行われます。

四 「新潟在勤中日記」

川村修就の新潟奉行在勤中の日記から、盆踊りに関する記事を見ていきます。天保十五(一八四四)年七月十三日の記事によれば「盆中につき」という理由で、この日から奉行所も休日になりました。夕方からは寺町通に市中の人びとが「群集」して暮参りしているさまが記されています。

と言われます。決まつた形がなかつた盆踊りは、健康的な踊りが志向され、「新潟甚句」として作り上げられていきます。さらに戦後は、民謡ブームと住吉祭、川開き、商工祭、開港記念祭の統合による「新潟まつり」の誕生を背景に、盆踊りは「民謡流し」となりました。

こうした一方で、新潟の盆踊りは芸妓の座敷での「芸」として引き継がれ、洗練されていき、現在の新潟料亭文化の一角をなしています。写真3。

新潟の盆踊りは、姿と形を変えて、いくつかの潮流にわかれてなお、新潟の人びとに受け継がれています。



写真3 絵はがき 芸妓の盆踊り(当館蔵)

〈主な参考文献〉

- ・新潟市郷土資料館編「新潟市郷土資料館調査年報第9集 川村修就文書Ⅷ」一九八五
- ・新潟市史編さん室「新潟市史通史編1 原始古代中世近世(上)」一九九五
- ・同「新潟市史通史編2 近世(下)」一九九七
- ・同「新潟市史通史編3 近代(上)」一九九六
- ・同「新潟市史資料編5 近代1」一九九〇
- ・伊藤義博「新潟盆踊りのたどった道へうたの有り様の変容」新潟大学教育学部研究紀要人文社会科学編「二二」二〇〇九
- ・「にいがた総おどり」<http://www.soldori.net/>

(あたか しゅんすけ 学芸員)

第十一回むかしのくらし展 冬のにいがた

渡邊久美子

当館では、館蔵資料や地域の各施設に所蔵されている資料を使って、小学生の社会科の単元に対応した「むかしのくらし展」と題する展覧会を毎年秋に開催しています。むかしのくらし展は、毎年テーマを変えて、様々な視点から生活の移り変わりや昔の生活を伝えてきました。今年で十一回目を迎えます。

今回のむかしのくらし展は、冬の新潟をテーマとして、高度経済成長期以前に使われていた道具を通して冬の生活の様子を紹介します。



フカグツ(当館蔵)



糸車(当館蔵)

展示室は大きく八つのコーナーに分かれています。

冒頭では、新潟の冬を特徴付ける季節風や、雪への対処のため、新潟の人のびとはどんな工夫をしていたのかパネルを使って紹介しています。前回の「ふゆのにいがた」展では、強い季節風から家屋を守るため、市内の農村部でみられたヨシの冬囲い、風除けを取り上げ、実物のヨシをつかって再現展示を行いました。

今回は風除けや冬囲いのほかに、海岸沿いに林立している砂防林について触れています。砂防林が無かった頃、海岸沿いの町や村では、季節風によって飛んできた砂(飛砂)で家屋や田畑が埋まるといことがありました。この飛砂をふせぐために、江戸時代から海岸に植林が行われました。その後も中断と再開を繰り返しながら、植林は続けられ、現在に引き継がれています。

海岸沿いの道路を埋める飛砂の害などは、今でも身近に感じられる問題です。先人たちがどのように対処してきたのかを知るきっかけになればと思います。

「むかしのくらし展」

展示の中盤からは、明治時代から昭和三十年代頃に時代を設定し、当時の衣食住のほか、農家の冬の仕事に焦点を当てた展示を行っています。

稲作を生業とする農家の冬の仕事として、まずワラ仕事があげられます。そ

の様子をわかりやすく伝えるため、ワラ仕事などの作業を行った土間づくりの二ワ、団らんの場であった茶の間の様子を再現しています。

茶の間のコーナーでは、紡織にかかわる資料を展示しています。

江戸時代から明治時代頃までは、糸車で糸をつむぎ、機を使って布を織り、家族の衣服を仕立てる仕事を女性が農閑期に行っていました。蒲原地域の各在郷町では、木綿布生産が産業としても盛んにならていき、質糸引きや質機といつて、道具を借りて糸をつむいだり、布を織って収入を得る副業も行われるようになりました。

紡織やワラ仕事など、家の中で行われた手仕事は、これまで体験活動とともに当館が調査を進めてきた分野です。本展でも関連イベントとして機織体験を開催します。

このほか、昭和三十年代以前、冬季の野外の仕事として行われていた湯や川、田や水路での漁を紹介しています。

乾田化される前は、平野のあちこちに湯や川があり、田は冬でも水面が広がっていました。そこには、色々な種類の生き物がすみ、人びとは魚などをとって売ったり、日々の食材にしたりしていました。

このコーナーでは、冬の間、凍った水路や湯で行われたザイ掘りとよばれる漁を取り上げています。今回、新潟市湯東歴史民俗資料館所蔵の市指定有形

民俗文化財「鰻湯で使用されていた漁労・狩猟用具」から、ザイ掘りの資料を展示しています。また、浜辺のくらしの事例として、旧巻町角海浜の岩場で冬の間行われた海苔摘みの道具も紹介しています。

「冬の生活の移り変わり」

展示の最後には、高度経済成長期以降に登場した冬の暖房具を紹介しています。昭和三十年代に入ると、木炭や石炭に変わり、石油やガスが燃料の中心になつていきました。石油を燃料とする芯式の石油ストーブや、電気コタツなどの今でも身近に使われている電化製品が普及しました。

ここでは、昭和三十年代頃の冬の住まいの様子を再現し、エネルギーの変化とともに登場した暖房具を紹介しています。資料を通じて、現在につながる生活の移り変わりをご覧いただけたらと思います。

このように、今回の展示では冬の新潟の生活文化にかかわる資料を多数紹介しています。小学生を対象とした企画展ではありますが、その保護者世代、祖父母世代の方々など、異なる世代で一緒にご覧いただき、昔のくらしに思いをはせ、今のくらしを見つめるきっかけとなれば幸いです。

(わたなべ くみこ 学芸員)

歴史さんぽ

初代萬代橋の木杭

新潟市中央区万代・万代クロッシング内



萬代橋から新潟駅方面へつながる国道7号(万代橋通)のラブラ万代と新潟テレコムビルの間には、地下歩道が整備されています。一般公募により、この地下歩道は「万代クロッシング」と名付けられています。安全で快適な歩行空間の確保をめざして整備され、平成9年12月24日に開通しました。

この地下歩道の一角に3本の木製の柱が立っています。この柱こそ、初代及び2代目萬代橋を支えていた橋脚の木杭です。平成8年6月、この地下歩道の工事の際に12本の杭が発見されました。いずれも杉の丸太材で、直径40センチメートル程のものが多く、長さは最大のもので14メートルに達します。残存状況から少なくとも15メートル以上の長さがあったと考えられています。杭の先端は削られ先が尖っています。これらの杭が河底に深く打ち込まれ、基礎の柱となってその上に橋が架けられていました。なお、この時に見つかった最大長の杭は万代クロッシングのケース内で展示されています。そして、3本の杭が発見された場所に設置されたのです。

萬代橋は信濃川の河口部に明治19(1886)年に完成しました。当時の信濃川の川幅は現在よりも3倍ほど広く、橋は現在のオークラホテル新潟の北側から流作場五差路まで全長約782メートルにも及びました。現在、流作場五差路には「萬代橋」の橋名板が

ついた親柱と欄干の一部が復元されています。

初代萬代橋は明治41年3月の大火で焼失し、2代目はほぼ同じ形状で初代の杭を利用して架けられたようです。萬代橋の杭の発見は、初代・2代目萬代橋の時代には、万代シティー帯がまだ信濃川の中であったことにあらためて気付かせてくれました。大正11(1922)年に通水した大河津分水によって、下流の新潟市に流れる信濃川の水量が減り川幅も狭くなりました。昭和4(1929)年には全長約307メートルの現在の3代目萬代橋に架け替えられ、この年から流作場河岸の埋め立ても始まりました。

万代クロッシングの3本の杭は、木造で長大であった在りし日の萬代橋を語る遺構です。万代シティーを訪れた際にはぜひお立ち寄りください。そして、杭を見学した後は、地上に出て、現在の萬代橋からさらに流作場五差路まで続いていた初代の萬代橋の情景を想像してみてください。

小林 隆幸(こばやし たかゆき 学芸員)

おすすめの1冊

館柳湾

本書は、江戸後期の漢詩人館柳湾の、詩と生涯を記した書です。柳湾は宝暦十二(一七六二年)、新潟の廻船問屋に生まれ、幼くして両親を亡くし親戚の巻町(新潟市西蒲区)館家に預けられました。学問に秀でていた彼は十三歳で江戸へ出て幕府の役人となり、同地で八十三年の生涯を終えました。帰郷したのは一度だけのようですが、新潟に心を寄せ、ふるさとの人々との交流もさかんだったようです。「柳湾」という号は、柳のある信濃川のほとり、生家の景色に由来するといわれています。

本書の魅力は、詩を親しみやすく解説していることです。帰郷時、巻町から水辺を眺めて作られた詩「江都の二部」飄風笛曲囉囉哩、揺月櫓聲軋軋、風に吹かれて笛の音が、パイヒヤフラと聞こえてくる。月を揺すぶっているかのような音がギツチラギツチラ耳に入ってくる感じが伝わります。

漢詩とは難解なものですが、当時においても古風で難しい言葉をわざわざ使い、詩情と語感を楽しんだ「遊び」でもありました。

(中村 里那 学芸員)



鈴木瑞枝
『日本漢詩人選集13
館柳湾』
研文出版
1999年1月

新潟市下山字根室の新潟地震による被害写真について

田嶋 悠佑

平成二十六年は新潟地震発生から五十周年の節目にあたり、当館でも六月十四日から八月二十四日まで新潟地震を主題とした企画展を開催しました。企画展のための調査の中で、新潟市下山字根室(以下、根室と略す)の被害を写したと考えられる写真を確認しました。

根室は現在の新潟市東区の新潟県浄化センター付近に存在した、漁業と農業を生業とする集落でした。根室は新潟地震によって発生した液状化現象と阿賀野川を逆流した津波によって大きな被害を受けました。地震後に集落内から集団移転の意見が出て市や県などと交渉の末、土地の整地やソ連からの救援木材の提供といった公的な援助を受けて昭和四十二年度までに三十三戸全戸が集団移転しました。

根室の被害状況や移転の様子については被害の大きさや全戸移転という大規模な事業にもかかわらず、管見の限り『新潟地震災害復興計画』(新潟県、一九六四年)や『新潟地震誌』(新潟市、一九六七年)などで被害や集団移転の経緯について若干の説明がなされるのみでした。

そうした中、『新潟地震による河川堤防被害(阿賀野川)について』(建設省北陸地方建設局新津工務事務所、一九六四年)と同書に使用した元写真が国土交通

省北陸地方整備局阿賀野川河川事務所(以下、阿賀野川河川事務所と略す)に保存されているのを知り、その調査を行いました。新潟地震当時、建設省北陸地方建設局新津工務事務所では阿賀野川の治水を管轄しており、地震によって破損した阿賀野川の堤防の状況を確認するため写真を撮影していたのです。写真は後継機関の阿賀野川河川事務所に受け継がれ、アルバム四冊に保存されていますが、撮影地の地名や河口からのキロ数

が記されていた写真はわずかでした。阿賀野川河川事務所蔵の写真には阿賀野川流域の集落の様子も写されていたため、根室を撮影した写真がある可能性があります。かつて根室にお住まいだった方にも照会をしてみました。新潟地震から時間が経ちすぎていて写真

をみても場所がわからないということで、撮影地を特定できる証言は得られませんでした。写真を検討すると、建築物から根室と考えられる写真があることに気づきました。その写真は二枚で、連続して撮られたパノラマ写真のようになっています(①、②)。白黒の写真なので分かりづらいのですが①をよくみると、手前右側に水面があつて建物が反射して映っており、集落が浸水の被害を受けていることがわかります。一方、場所の特定で重要なのは②です。この写真には現在も架かっている松浜橋が写っています。現在の松浜橋は建設中に新潟地震に遭遇し、橋桁の一部が落下する被害を受けました(写真③)。この落下した橋桁の場所は、新潟県による橋の復旧記録(注)によると松浜側から四つ

目を橋桁でした。これを踏まえて②をみると橋桁は全て残っているため、松浜橋下流左岸から上流を撮影したものと推測されます。撮影場所は当時の航空写真と建物の配置を見比べると、おそらく根室の集落北側でしょう。

今回幸いにも二枚の写真の場所比定を行うことができましたが、この写真が示しているのは根室の被害のほんの一部にすぎません。新潟地震の資料は、新潟市市街地に比べて郊外の資料が希薄です。その要因としては、(1)新潟地震による被害で報道関係者や研究者の取材や調査が困難だったこと、(2)新潟地震当時、昭和大橋や昭和石油の火災のような被害が目立つ建造物が注目されがちだったこと、(3)新潟地震の後、新潟市市街地の被害が繰り返し取り上げられ郊外の被害に目が向かなくなったことなどがあげられます。新潟地震という新潟市中心部の被害に目が行きがちで、当館の企画展でもこの偏りを脱しきれませんでした。企画展の反省を踏まえ、根室をはじめとした新潟市周辺地域の新潟地震関係資料を今後も調査していきたいと考えています。

(注)「松浜橋手戻し資料」新潟県立文書館蔵、新潟市歴史博物館編『新潟地震展 体験、記録、復興の五十年』二〇一四年、三五ページ(たじま ゆうすけ 学芸員)



写真①(阿賀野川河川事務所蔵)



写真②(阿賀野川河川事務所蔵)



写真③松浜側から見た松浜橋橋、トラスト橋被害(新潟市歴史文化課蔵)

鶴の友とは

新潟市西区には「鶴の友」という名前のお酒があります。同区に住む筆者は、この名称が気になりうかがってみますと幕末に「明の鶴」という酒の一字をもらい、生まれたものだとのことでした。ここに愚考の一端を述べたいと思います。

「鶴」で私がいま思い浮かべるのは、日本庭園の池に浮かぶ鶴島や亀島です。鶴・亀は寿を司る天帝とその神仙思想の世界を表現するものとされてきました。そこから鶴・亀は羽化登仙の想いに至るお酒に、吉祥を念じる名称としてよく用いられているようです。

さて「鶴の友」の語句を分析すると、まず「鶴」から観たときの「友」(＝同等)を意味します。「鶴」と同等の縁起の良いお酒ということでしょうか。また、「酒の友」といえば肴のことですから、「鶴の肴」「肴としての鶴にふさわしい酒」の意味とも思えてきます。

「魏志倭人伝」の昔より倭人は、「人の性、酒を好む」と神仙思想ご本家の中国史家に書かれた酒好き種族です。奈良時

代には春耕の節に村ごとに郷飲酒礼を行うよう費用に公費を当てるのが法制化されていきました。鶴も酒宴に供されることがあったかもしれません。和食成立の室町時代に発達した本膳料理の極上料理に、「つるの汁」「つるの献」が料理書に見え、江戸時代に「つるの包丁」という將軍献上の鶴を料理し、天皇に供する儀式もあつたりしたこととです。もちろん他の身分で鶴を食するの

はご禁制です。しかるに青木美智男氏は著書『二茶の時代』(校倉書房)で、十九世紀歌舞伎人気役者はご最良衆への年始に鶴の羽根を一本添えて挨拶回りをしたが、それは正月に鶴料理を食べたという暗喩だと述べ、幕府のご禁制の効き目がなくなつていたと指摘しています。

幕末ともなれば、お酒が「鶴の友」になつても不思議ではない時代があつたのかなあと、門外漢の私は思つたりしているのです。むろん、今では特別天然記念物に指定されている鶴を、捕獲したり、食べたりしてはいけません。

収蔵資料紹介

綿切り

綿切りは木綿織に使う綿花の綿毛(繊維)と実(種)を分ける綿繰りという作業に使う道具です。木綿の紡織工程に欠かせない道具で、実繰り、綿繰りなどとも呼ばれ、新潟では綿切りと呼ばれました。写真の綿切りは墨書きで「請合 大野町 万五郎」とあり、西区大野で作られたもので、江戸時代後期の後野は、周辺農村で作られた綿が集まる町でした。

一般に綿布の製造は、生産規模の拡大にともなつて、綿花の生産から紡織までの工程を各地域で分業し、工程に関わる職種を生み出し流通業など関連業種にも影響を与えました。蒲原の平野部でも十七世紀には綿作の記録が見られ、十八世紀初めには周辺地域から手織布木綿が新潟町に持ち込まれて売買されています。江戸時代後期に各在郷町で町の名を冠する木綿の布が生産され、町の主要な産業となつていきます。町や周辺農村の副業として、綿打ちや賃糸引き、出機など、木綿織りに関わる関連職種が成立します。

写真の綿切りには、二本の軸にそれぞれ軸に対して一定の角度でつるまき状の溝が彫り込まれています。取っ手を回すと軸の溝が他方の溝にかみ合いながら歯車のように回転を伝えます。二つの軸が逆回転することで綿毛を取り込みつつ、種は軸にはばまれて綿毛だけが送り出されるという仕組みです。軸のかみ合わせがつる

まき状をなすのは、つるまき状の溝同士が少しずつかみ合い位置を変えながらも不断に接点を持ちながら回転することで、しっかりとついている綿毛を種からはぎ取りやすくする工夫と推測されます。

こうした手回し式の小型綿繰り具は十八世紀には文献に登場するようになり、産地として(宮(愛知県)や加古川(兵庫県)が知られていますが、写真の大野の綿切りのように、木綿織りの広がりとともに各地で小規模に製作されていたようです。高い精度で二軸のかみ合わせをつくる技術者が各地にいて、綿を効率的に綿繰りする綿切りを普及させたのでしよう。各区が所蔵する綿切りの中には、大野や葛塚、沼垂などの作り手の名を記した資料があり、屋大工や下駄職人が閑散期の副業とした事例や、慶応二(一八六六)年の小須戸町に「綿繰り」という職種の記録があります(小泉軒軒「両組産業開物之巻」)。副業的だとしても、綿切りをはじめとする紡織具が各地の在郷町で需要され製造されていたことがうかがわれます。

(森 行人 学芸員)

